

担当：T.N.

課題①：テキストまとめ

The Art of Teaching Speaking Chapter 6 : Assessing Speaking

第一に、適切な評価を行うために教師は試験作成のときだけでなく、最初の授業計画の段階で評価について考えるべきである。そして、授業で学習者が習った方法や形式と異なる形式の問題を試験で課すべきではない。

■ Revisiting Students' Speaking Needs

「ESL や EFL のスピーキング学習者が本当に求める言語とはなにか」について考えることが、スピーキングクラスの構成と評価方法を考えることにつながる。この本の p.4 では、「スピーキング/会話クラスの教師は、学習者がより重要だと考える側面は、学習者が英語での発話を学ぶ中での最終目的のしだいである」と述べている。また、学習者のニーズが授業中の活動を左右し、活動内容が評価を左右する。したがって、評価とは、学習者のニーズがどれだけ満たされたかを測るものである。

■ Three Stages of Speaking Assessment

・ Pre-Instruction

Pre-instruction での評価は、学習者が授業を受ける前の時点でどの程度知識があるかを評価するものであり、学習者の得意な点・苦手な点にどれだけ時間を割くかを定めるために重要なことである。評価方法として、直接学習者と話す、または、学習者の英語力に関するアンケートを行う、などが挙げられる。

・ During Instruction

During instruction では、学習者のパフォーマンスを評価することで、学習者が補助を必要としている点を確認できる。学習者が間違いを犯したときに、活動中にその間違いを正すことは、学習者の活動を抑制することになる。

・ Post-Instruction

Post-instruction で評価を行う場合には、学習者が活動を通してフィードバックを得るまで、どんな些細な間違いでも見逃さないように待つことが大事である。

■ Formal Assessment

・ Achievement Assessment

学力検査は、生徒がどの程度進歩したかを測るために設計されており、すべての教師は指導後の学力検査を行っている。しかし、多くの会話中心の授業では指導後の学力検査に重きが置かれていない。

- Pronunciation

学習者の発音の評価方法として、評価したい発音の単語を含んだ文章を作成し、音読を録音する方法がある。長所：教師が確認したい単語をすべて文章中に含むことができ、学習者が何を言おうとしたのかを確実に把握できる。短所：リーディングのように自然な発話とは異なったものになり、正確にスピーキング能力を測っているとは言えない。

- Fluency

流暢さとは、正確さにかかわらず、伝えられた言語の量である。流暢さを評価するために、数枚の絵をランダムと時系列の2パターンで説明させる方法がある。長所：録音することで学習者のデータを簡単に集めることができる。短所：実際には何を評価しているのが明確でなく、採点方法によっては評価がおかしくなる場合がある。

- Language Accuracy

言語の正確さを評価する方法として、絵の説明をさせる方法が挙げられる。長所：説明の中の間違いを数えるだけなので、採点が簡単であること。短所：項目としては間違いが一つでも、回数としてはそれ以上となり、点数が低くなってしまうことである。

• Direct versus Indirect Assessment

直接的な評価方法：生徒一人一人とインタビュー形式で会話をを行い録音する。長所：普段会話をする状況に近いので、実際的な文法の確認ができる。短所：時間がかかり、他の学習者を待機させる。

間接的な評価方法：正確な発話分を空欄埋めや、間違い探しなどで書かせる。

• Scoring

評価の基準をしっかりと設定すれば、会話タスクも評価できる。直接的なテストの長所：能力の自然な使用を試験できる。間接的なテストの長所：採点が簡単。

• Proficiency Assessment

- TOEFL®

TOEFL®を受験する学習者のために教師がすべきこと：授業の中で、TOEFL®の項目だけでなく試験の形式も含んだ、広範囲にわたる演習を行う。

- TSE®

TSE®では、物語を話す、絵や表を説明する、質問に答えるなどの具体的なスピーキング能力が評価される。

- IELTS®

IELTS®のスピーキングテストは3つのパートに分かれ、(1)受験者自身に関する総体的な質問に答える、(2)自身に関するお題について議論する、(3)パート2に関連したより抽象的なお題について議論する、の3つを通じて評価される。

■ Summary

直接的な方法での評価は、時間がかかったり、採点基準の設定が困難であったりと、採点するのが難しい。間接的な方法での評価は簡単に、正確に採点できるが、記述式の解答が本当に学習者のスピーキング能力を反映しているのか、という点で妥当な方法であるとは言えない。タスクは学習者の求めるものを把握した上で作成する必要がある。

本講義を受講して

本講義を受講して、スピーキングの授業、特に会話の授業に関して、指導法や各国の学級経営方法の特色、活動例などを学ぶことができた。上に記してあるように、このテキストの中でも、**CHAPTER 6**を選んで要約した理由は、次に述べる通りである。

私は大学を卒業後、すぐに大学院に入学したため、実際の教育現場での経験というものは、教育実習と母校の中学校で行っていたスクールサポーターとしての活動だけである。母校ではスクールサポーターとして、別室登校の生徒の勉強を見たり、放課後の自主学習の監督・補助という形で生徒とかかわっていた。しかしながら、教育実習はもちろん、スクールサポーターであったときも、生徒の活動などに対しての評価は担当の教員が行っていたため、私は今までに生徒の評価をしたことがない。したがって、私が実際に教師になった時に、果たして適切な評価を行えるのだろうか、という不安があったため、評価に関して述べている**CHAPTER 6**を選び、要約をした。大学の教職課程の授業でも、英語科教育の指導法や活動の考え方、学級経営や教職教養に関しては学んできたが、生徒の評価方法に関しては、そこまでしっかりと学んだ覚えがなく、以前から大学でも「適切に生徒の活動を評価するためにはどうすればよいのか」ということに関する授業があればと考えていた。そこで、この**CHAPTER 6**では、スピーキング能力に関するものだけではあるが、評価の方法や、評価を行うのに適した活動やタスクの例が提示されていて、具体的な評価方法などを学ぶことができた。

しかし、このテキストには少し問題があるように思える。それは**CHAPTER 6**に限ったことではなく、このテキストで提示されている例というのが、ほとんどが筆者の体験に基づくものであるという点である。筆者が実際に経験したことなので現実味は十分にあるが、実際に実験などを行ってわかったことではないので、一般化されていない、筆者の主観的な考えが入っているのではないかと考える。もう少し、筆者の実体験だけでなく、一般的な理論などと合わせて指導法などが提案されていれば、信憑性も増したのでは、と考える。

しかしながら、あくまでこのテキストで提示されている例などは一例であると捉え、自分の指導法や評価法の選択肢のうちの一つという風に考えていれば、自分の指導法がうまく機能しなかったときなどに、また別の選択肢として使用できる。また、このテキストの情報をもとにして、自分なりに発展させた方法なども考案できるであろう。特にスピーキングは、効果的なタスクを考案するのも難しいし、適切に評価するのも難しいと私は考えている。このテキストは、スピーキングのタスクや評価方法について考え、授業内で他の学生と議論を交わし、意見を交換する機会を与えてくれたため、今後役に立てることのできる知識を、この授業で得ることができた。

課題②：論文まとめ

【論文1】

Fujita, R. (2014) Influences of film on EFL learners' listening abilities: Focusing on the comparison between film- and textbook-based dictation practice, *ARELE*, 25, 95-110

本研究の目的：Film-based と textbook-based のディクテーション演習の違いに焦点を当て、EFL 学習者のリスニング能力に対する映画の影響を検証する。

1. Introduction

先行研究から、film-based のリスニング演習の影響については分かったが、教科書教材の影響との違いについては明らかになっていないため、本研究では以下の二つをリサーチ・クエスチョンとする。

RQ1: film-based のディクテーション演習が学習者のリスニング能力に与える影響は、textbook-based のものと違いがあるか。

RQ2: 学習者が聴解において困難だと感じる要因は film-based のディクテーション演習群と textbook-based のディクテーション演習群間で異なるか。

2. Method

2.1 Participants

様々な専攻の日本人大学生 52 人 (film-based 群 25 人、textbook-based 群 27 人)

2.2 Materials

- ・熟達度テスト：TOEIC Bridge practice test(Takayama & Tozer, 2009)から採用。
- ・リスニングテスト：部分ディクテーションテストと聴解力テストを使用。各テストとも、film-based と textbook-based の二種類ずつを事前・事後テストで使用。
- ・部分ディクテーションテスト：1 分程の長さの SCRIPT に含まれる JACET8000 から最初の 2000 語内の語を空欄にしたもの。
- ・聴解力テスト：film-based のテストでは映画の内容に関する選択肢形式の問題。Textbook-based のテストでは、TOEIC Bridge のリスニングセクションから採用。
- ・教材：2 種類の部分ディクテーションワークシートを 5 つの SCRIPT ごとに作成。ジャーナルシートにはディクテーション活動に対するコメントを書かせた。
- アンケート：学習者の動機づけ要因や聴解度を測る質問に、4 段階で回答。

2.3 Procedure

Film-based 群：映画を週に一シーンずつ字幕なしで視聴後、ディクテーションを行った後、答えを確認し、指導者は会話の意味や音声的变化を含む単語の解説を行う。

Textbook-based 群：教材は textbook-based のものを使用し、それ以外は film-based 群と同様に行う。

2.4 Data Analysis

2(Test timing: pre, post)×2(Group: film-based group, textbook-based group) two-way ANOVA を使用。Test timing は被験者内要因、Group は被験者間要因とする。

- ・ディクテーションテスト：Oller's (1979)の方法に基づいて採点。
- ・ディクテーションワークシート：学習者が正しくかけた単語の割合を計算。
- ・ジャーナルシート：学習者が聴解において困難に感じた点を調査。
- ・アンケート：film-based 群と textbook-based 群間で独立 t-検定を用いて分析。コメントは性質ごとで分析。

3. Results and Discussion

3.1 Listening Tests

- ・film-based のインプットは、リスニング能力を向上させる。
- ・film-based と textbook-based どちらのディクテーション演習も、film-based の聴解力を向上させ、film-based のディクテーション演習は textbook-based の聴解にも効果がある。
- ・film-based の聴解テスト以外の事前・事後テストで目立った向上は見られない。

3.2 Dictation Worksheet

- ・短音節や機能語などが聞き取りにくく、聞き慣れた単語はよく理解できていた。
- ・film-based 群：連続発音が苦手、映像と対応した単語の正答率が高い。
- ・textbook-based 群：高レベルの語彙が苦手、長音節の単語は正答率が高い。
- ・ジャーナルコメント：film-based 群は登場人物ごとの発話の速さの違いに、textbook-based 群は機能語や冠詞などを聞き取る能力について言及した。

3.3 Questionnaire

- ・ディクテーション演習を行うことでリスニングに慣れたため、一般的なリスニング能力の向上を感じた。
- ・film-based 群は映画の速い発話に困難を感じ、textbook-based 群はリスニングが苦手であると述べている。

4. Conclusion

RQ1：film-based 群に聴解力のわずかな向上が見られたが、リスニング認知能力には目立った向上は見られなかった。両群ともリスニング能力の向上は感じた。

RQ2：両群とも機能語や短音節語を難しいと感じ、film-based 群は発話の速度、textbook-based 群は高レベルの語彙を難しいと感じた。

考察

- ・10 週間の学習者のリスニング能力の向上を調査するには短く、テストの点数も目立った向上を示さなかった。
- ・映画の部分ディクテーションテストは本研究の学習者には難しく、学習者のリスニング認知能力を適切に測定できていない。

教育的示唆

- ・film-based のディクテーション演習は、学習者を本物の言語インプットに慣れさせる。
- ・textbook-based のディクテーション演習は、テキストの詳細に学習者の注意を向けさせたいときに有効である。

【論文 2】

Kadoyama, T. (2008). Teaching communication through the use of films, *ARELE*, 19, 243-252.

本研究の目的：映画から抜粋した一連の短いシーンを見せることが、オーラルコミュニケーションの指導に役立つかどうかを検証する。

1. Introduction

- ・多くの先行研究 (e.g., Iida, 1988; Kan, 1995) で film-based のリスニングタスクはタスクを行っている間しか動機づけは持続せず、授業の中で補助的な役割となっている。
- ・多くの学習者は、既存の教科書の会話を用いたものよりも、映画を用いてオーラルコミュニケーションを学びたいと感じている。

2. Film-based College English Textbooks

- ・映画のシナリオを用いた film-based textbook は、映画の使用法を補助的な役割に限定した読解指導用の教科書となっており、シナリオを用いない film-based textbook も、文化的側面に重点を置いた読解指導用の教科書となっている (Kadoyama, 2006)。
- ・言語的側面に重点を置いた film-based college textbook は、平均的な大学生にとっては難しすぎる傾向がある (Akimoto & Hamada, 2007)。

3. The Study

3-1. Teaching Materials

英語熟達度の低い学習者のためのオーラルコミュニケーション指導用に、film-based の教材を以下の 3 つの基準を設けて作成。

- (1) 教材は一つの映画から抜粋した 3-5 分のシーンを使う。
- (2) 学習者が楽しんで映画を視聴できるよう、学習者はプロットを読むことができる。
- (3) 教材は基本的な会話用教科書に含まれているような内容を含む。

- ・授業の目的は、短い映画のシーンを用いて学習者を英語の会話と基本的な言語機能に慣れさせることであり、リスニング能力とスピーキング能力に重点を置く。

3-2. Participants

- ・英文学もしくは英語学専攻でない日本人大学生 33 名。
- ・前期に補助活動として film-based の教材を使用し、基本的な会話の教科書をメインとした授業を受講し、後期に film-based の教材をメインの教科書とした授業を受講。
- ・各学期の最後に、授業に関するアンケートを実施。

3-3. Teaching Procedures

- ・視聴前活動：“What Would You Say?”
- ・その後、字幕なしで映画を視聴し、そのシーンに関する質問に理由付きで回答。
- ・次に、音声を聞きながら会話文中の空欄を埋め、字幕付きで視聴して答えを確認する。
 - ・視聴後活動：個人とペアと会話文の練習と、視聴前活動で出た答えをもとに、重要な表現や有用な表現を説明した後、それらの表現を用いた短い会話文をペアで作成。

3-4. A Functional Approach to Film-based Materials

- ・この授業は機能シラバスに基づいており、映画を通して機能的な会話が与えられる。
- ・特定のシーンで行われる会話を考えさせることで、様々な適切な表現があることに気づかせる。
- ・教科書に含まれているような重要表現がそのシーンに含まれている必要はない。
 - 授業で使うことができる映画を探しやすくなる。

4. Results and Discussion

- ・アンケートの結果：メインの教科書としての **film-based** の教材の使用により、協力者は映画を用いたオーラルコミュニケーション活動に興味を持ち、教科書の会話文より、映画の会話文の練習を好み、また、多くの有用な表現を学んだということもわかった。

5. Conclusion

本研究では、映画の一連のシーンを用いた活動は、学習者の動機づけや興味を高め、機能的アプローチを用いることで効果的に有用な表現を学習できるため、オーラルコミュニケーションの授業で利用できることがわかった。

【論文考察】

以上の二つの論文(Fujita, 2014; Kadoyama, 2008b)の研究結果から、考察を行う。どちらの研究においても、学習者は映画を用いたディクテーション活動を楽しいと感じ、積極的に授業に参加するようになっていたため、映画を用いた活動には、学習者の動機づけを向上させる効果があると考えられる。このことから、映画を授業内の活動としてどのように組み込むかが問題となってくるが、上記の二つの研究(Fujita, 2014; Kadoyama, 2008b)では、ディクテーション活動用の教材としても映画を用いていることから、ディクテーションが最も適した映画の使用法のひとつであると考えられる。映画は学習者の英語能力に応じて作成されているわけではなく、学習者のレベルに応じた映画を探すのは時間がかかるが、ディクテーションに用いることで、教科書教材よりも現実味のある実際のネイティブの会話に触れることができる。教科書教材では、学習者のレベルに合わせた速度で会話が行われるが、映画では登場人物ごと、場面ごとで会話の速度が変わるため、より現実的なコミュニケーションに触れ、実際の場面で役立つ能力が養われると考えられる。また、Fujita (2014)で述べられているが、**film-based** のディクテーションと **textbook-based** のディクテーションでは、学習者が注目する点が異なり、**film-based** のディクテーションでは学習者は会話の速度に注目し、**textbook-based** のディクテーションでは学習者は会話文中

の詳細に注目する傾向がある。この傾向を利用して、film-based と textbook-based のディクテーションを行うことで、効率の良い活動が行えると考えられる。

しかし、同時に映画を活動に利用することの問題を解決しなければ、映画を用いた活動を行うべきではない。Fujita (2014)で述べられているが、10 週間という短期間ではリスニング能力の向上は見られず、また、映画の内容によっては、学習者にとって難しすぎるものになり、学習者の能力を正確に測れてはいない。そこで、どのような映画でも活用できるように、Kadoyama (2008b)は、教科書に含まれているような重要表現を用いた会話を使用している映画を様々な映画の中から探すのではなく、映画の 1 シーンの状態だけを利用して、学習者に特定の場面ではどのような会話が行われるかを考えさせることにより、数ある映画の中から特定のものを探す必要がなくなる、と述べている。こうすることで、学習者のレベルに応じた映画を探さずに、学習者の知識を活用した活動が行えると考えられる。

しかしながら、上記の二つの研究(Fujita, 2014; Kadoyama, 2008b)では、映画が学習者の興味をひきつけながら、有用な表現なども学習できることがわかったが、短期間であったために映画によるリスニング能力の向上が見られなかったり、リスニング能力の向上に言及されていないため、映画を用いた長期の研究が必要であると考えられる。長期的に続けることでどれほどリスニング能力が向上するのか、長期で行う場合もディクテーション演習で映画を使用するのか、映画の視覚情報が学習者の聴解プロセスに与える影響はどのようなものなのか、映画と教科書教材をうまく組み合わせた活用法はあるのか、などについて研究することが可能であると考えられる。